

発行/昭和63年10月15日 No. 7
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

REPORT

ひびけ・感動のこだま
「モウー モウー塾」
川之江シンポジウム報告

特 花みち 集

バーベナ・テネラの咲くまち/徳島県阿波町
花づくりにかける/今治市
くらしの中の花々/松山市
つばきへの想い/小松町
花は咲きます/双海町
コスモスがいっぱい/玉川町

研究会議 News Letter

この夏無人島が燃えた!!
ミニ「木」のフォーラム
遊子からの提言 —ミニ・シンボ「海」—

MESSAGE

TOWN タウン パソコン通信
県民総合文化祭'88
えひめ地域づくり研究会議総会

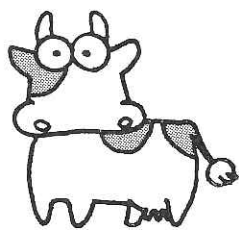
まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 7



REPORT



ひびけ・感動のこだま 「モウーモウー塾」

二十一世紀えひめニューフロンティアグループ代表

若松進一



『君は大野ヶ原地球人になれるか』、そんな問いかけに県下の子供達百余名余りが応募した今年の「モウーモウー塾」は、その中から選ばれた三十二名の小・中学生と、高校生ボランティアを含めた二十一名のリーダー、計五十三名が参加した。

三泊四日の始まりとも言える県立中央青年の家での事前研修で、私達は早くも難問にぶつかった。登校拒否の悪癖をモウーモウー塾活動を通して、何とか直してやりたいと願う親の思いでやって来たA子（中三）が、帰りたいと言い出したのである。四時間にも及ぶリーダーの説得にもかかわらず、ついに心を開かず帰宅の道を選んだA子を見送る私達の心は重かった。

A子が帰って、消灯後の午前一時頃、快い寝息の中に、時折苦しうにセキをする一人の子供がいる。B君（小五）は聞けばゼンソクの発作とか、保健婦の井上リーダーにお願ひし眠れぬ一夜を過ごした。このままでは体力がもたないとの判断から、先発隊が通過地点である久万町の病院で診てもらって合流するよう手配した。

この二つのことによって、リーダーの心の中に「モウーモウー塾」に対する新たな決意が生まれたことは言うまでもない。

夏とは言え、時折雷を伴って激しく降る雨の中、大野ヶ原に着いた私達は、休む間もなくモウーモウー活動にはいった。

「雨が降っても天に向かってブツブツいうな。雨の日には雨の日

の仕事がある」の塾訓にそってカッパ、長靴のいでたちで牛舎に着いた子供達は、牛の餌やりからうんこの片付け等、初仕事の戸惑いの中にもかいがいしく働いた。

初めて触る牛の体に心ときめいた小四の女の子、思わずペロリとなめられ驚いた中一男子の笑顔、人口受精の風景に、「牛の赤ちゃんはどうして生まれるの」と質問され、おもわず顔を赤らめた高校生リーダー等、労働を通して得たかすかな手ごたえがこちらにも、伝わって来る思いであった。

夜八時、仕事を終えて農家から山の家まで帰る暗闇の一本道も、みんなが大きな声で歌いながら歩いた。そして、雨に冷えきった体をドラムカン風呂に沈めて暖を取り、「夜は夜星の活動」を終えた。

あくる朝の起床は午前三時、「朝は朝星活動」の始まりである。眠気を覚ます鐘の音に身支度を整え、日の丸弁当を持ってまだ明けやらぬ大野ヶ原高原の冷気を体感しながら、酪農農家の黒河さん宅へ。黒河さん一家は愛想のよい笑顔で私達を迎えてくれた。



「あったかーい……」

いよいよ楽しみにしていた牛の乳搾りの始まりである。奥さんの指導で乳を拭き、「牛は愛情があれば暴れることもなく乳を絞らせてくれる」と、体で諭すご主人の手を取った指導で二頭ずつ乳を絞っていく。腹の下にもぐる子供達も、そばで万が一事故が有ってはと気遣う黒河さん一家にも、真剣な時



▲掘りたてのだいこんの味、どんな味？

が続く。やがて純白の奇麗な牛乳がパイプを通してタンクまで運ばれ、子供達を感心させる。

生まれて初めて牛の乳に触り、生まれて初めて乳を搾った。「思ったより暖かった」と目を輝かせて語る子供達の姿に目を細めながら、牛乳を使って作った手づくりの蒸しパンと、沸かした絞りとての牛乳を御馳走してくれた黒河さん一家の気配りをこどもたちは忘れないだろう。

このモウーモウー塾に大野ケ原の有馬くん（小六）も参加したが、小さな草原の小さな小学校から来た子供らしく、まじめで、街の子にないすがすがしさをもち、かいがいしく動く姿には胸打たれるも

のがあった。

あいにくの雨の影響でみんなが出来なかった大根抜きには、三・四班が参加した。長靴が全部埋まるダイコン畑での作業は困難を極めたが、「君はダイコン一本丸かじり出来るか」にも挑戦し、顔をゆがめながら、ダイコンの甘さや辛さを味わっていた。

源氏ヶ駄場から一夜ヶ森を経て山の家までのカルスト探検も、高原あざみのいばらにさえざられた道なき道をみんなで助け合っただけに、思い出のひとコマであった。

その夜の、「君は牛一頭食べられるか」の開拓の火まつりは、それまで雨のため不元全燃焼気味だった子供達のエネルギーが爆発した。昨日まで、全く知らなかった子供達とは思えない程の盛り上がりを見せ、食に、遊に、交に広がりを見せた。

大野ケ原最後の日、中心地が一望出来る小高い丘のうえの牧草地で、やまびこ会議を開いた。あらかじめ宿題に出しておいた、「私達が見た故郷」、「ぼくの夢わたしの夢」を発表し、この塾に参加

して感じたこと、体験したことをこれからどう生かすか、むらおとしグループ「起土愛楽」の黒河君をアドバイザーにして、熱心に討議した。又、講師の大野ケ原開拓の先駆者武田寛さんは、戦後の苦しかった開拓の歴史を熱っぽく語ってくれた。自然の厳しさや団結の力で克服した話には、子供達も感動したようで、フロンティア精神を垣間見る思いであった。

やまびこ会議の名の通り、最後はみんなで大声で叫んだ。静かな草原の彼方から山彦は元気に子供達の耳に帰って来た。このこだまこそ、二十一世紀に生きる子供達の力強い叫びであると思った。日本中に響けモウーモウー塾の子供達の声。

広々とした自然、悠然と草を食む牛、農家の暖かい受け入れ、知り合った友、この夏大野ケ原で過ごした二泊三日のひとコマひとコマを、心のリュック一杯に詰めてバスは四国山脈を縫うように走り、家族の待ち受ける松山へと帰って来た。

閉塾のそのとき、「別れの歌」

を口ずさみながら誰もが泣いた。ゼンソクを克服して頑張ったB君、二日間も帰りたいと笑顔を見せなかった登校拒否のCちゃん、昨年の経験を生かしてリーダーで頑張った恵ちゃん、終始飯炊きに徹した河野、木下、佐々木リーダー、こぼれる涙、握り締める手、抱き合う肩、総てが感動である。

「今やれる青春」に心を込めて戦った、「二十一世紀えひめニューフロンティアグループ」の今年の事業は三十二人の子供達によって見事に花開いた。それは社会への揺さぶりとなって、新しい運動に発展することであろう。

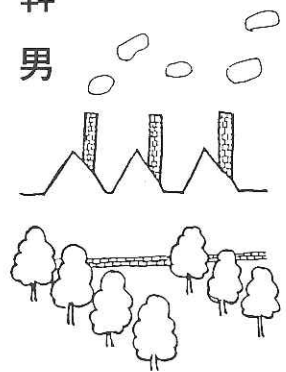


みんなでパチリ
(前列右から4人目が若松さん)

「川之江シンポジウム」報告

(財)愛媛県まちづくり総合センター

山本 幹 男



して加わった。

河内所長は、港湾の特徴と海からみた産業と今後の問題点について述べられた。その中で氏は、港の開発は、地域をつくることに役立って来たと分析し、地域をおこすことは、人が集って活発な活動が営まれることが必要であるが、その基盤となるのは、産業振興が大きなウェイトを占めてくると述べた。又、世の中を動かしていくうえでは、物の生産、特に、より高度な価値のあるものが生産されていくことで活性化がなされる。このことは、産業構造の転換の中では、大事な部分を占めている。当地川之江は製紙業で活況であるが、産業構造がモノトーンになっている。現在、全国でこのような企業城下町が苦しんでおり、川之江市も現在、余力があるうちに、紙の付加価値を上げるなど、蓄積しているノウハウを活用し、新しい分野への転換が、新たな産業おこしにつながると、産業構造の複合化を指摘した。

また、藤目助教授は、八百屋、



西岡慶大名誉教授の講演

川之江シンポとは

去る八月六日(土)十一時から、川之江市川之江文化センターにおいて、川之江シンポジウム「四国の産業振興と地域交流を考える」(当まちづくり総合センター共催)が開催された。

同シンポは、七月三十一日から八月八日にかけて行われる四国八十八時間シンポ「交流を通して四国のくにづくりを考える」(主催―四国のまちづくり研究会・瀬戸内婦人交流会・地域交流センター)の一環として開催されたもので、瀬戸大橋架橋により本州と四国が結ばれ、四国新時代を迎えた現在、四国中央地域の産業振興と地域間交流のあり方、四国横断道完成に伴う交通の結節点としての川之江の位置及び四国全土への影響、並びに四国各地域の連携のあり方を議論しようというものである。

シンポの前半は、昼食をはさんで、四氏の話題提供的な講演があった。

まず最初、西岡秀雄慶応大学名誉教授が「日本人の源流と四国文

座談会報告

化」、次に、山田哲司日本開発銀行高松支店長が「地域間交流と産業振興」、さらに、高原慶一朗ユニチャーム社長が「企業の行動原理と地域振興」、最後に、河島恒日本道路公団高松建設局長が「四国の道路ネットワーク建設と地域振興」と題し、それぞれ講演した。

続いて、座談会に移り、「四国の交流と地域振興を考える」―川之江から何が発信できるか―をテーマに、コーディネーター、村上克美松山商大教授、パネラーに、河内隆秀運輸省松山港工事事務所長、田村明法政大学教授、藤目節夫愛媛大学助教授及び川井保宏四国通産局係長で行われた。さらに、前半に講演された四氏もパネラーと



座談会風景

さかな屋など一つの商売が成立する条件として人口いき地という概念があるが、高速道路など交通体系の整備により時間、距離が縮まれば、越えられなかった人口いき地が越えられるようになる。これまで四国については、一体としてとらえることは意味がなかったが、高速道路が整備されれば、一体化は可能であり、人口いき地は、四国の県境を越えられると訴えた。

二十一世紀は、都市の魅力度で勝負する時代になるから、生産のまちだけではだめで、自然を取り組んだまちづくりを進め、行政の枠をこえた協力により、四国四県

立の施設を整備したらどうかと提言した。

次に、田村教授は、まちづくり・地域づくりは、違うものをどうやって結びつけるかだとし、久し振りに橋を渡って四国に来たが四国はやっぱり四国だ。四国は、ちゃんとあったという感じがした。今は、異質なものが交流することに意義があるのであって、四国が四国だった。つまり残っている文化・風土に意義がある。これからは、それぞれの違うものを発見し結びついていく、ネットワークしていく時代となる。従って未来に対して、これだけはあると、他の地域に、発信できるものをいくつ持っているかが重要になってくるとアドバイスした。

続いて、川井係長は、集積と産業について提言した。集積について、今は、異質な人と人々が交流して集まるのが、その地域の機能になっている。人の集積集中によって、人の生み出す効果が増えて来ている。その効果は三乗に比例し、集積の大小は、とてつもの

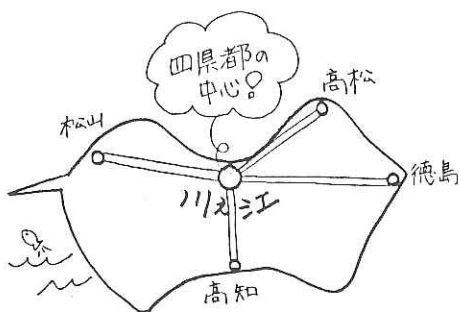
い差になる。だから、四国においても、四国全体で活用できるような、他地域に勝てるような、身分不相応な集積をつくって行かなければならないとした。又、産業については、最近の物ばなれ、消費傾向の多様化等をあげ、市場が飽和状態だと言われているが、使う側からの欲求はいっぱいあるのだから、物が売れなくなるというわけではない。作る方の理論からみると、すきま産業としか見えなもののでも、使う方の理論でいうとそこにはいっぱいできると、産業構造のソフト化を説明し発想の柔軟性を訴えた。

次にフロア討論に移り、フロアから、当地川之江市が将来どのような方向に進んでいったらいいか。高速道路の結節点を生かして、物流基地をめざしたらどうか。あるいは、どうやって四国らしい雰囲気醸成したらいいのか等、活発な質問が出た。

川之江からの発信

川之江から何が発信できるか、

高速道路が完成すれば、川之江から四県県都へは、ほぼ一時間でける重要な位置にある。物流基地、研究学園都市など様々な提言があったが、総じて言われたことは、川之江に限らず、その地域しかないもの、環境、歴史風土等、いろいろあるが、他地域に誇れるものを、作り上げるべきだ、という指摘であったように思う。地域づくりは、地域で生活する人が、そこを愛し、少しでも地域を良くしていくこうとする気持ち、行動が根底にあつて、他地域との交流によって、触発や情報交換を行い、がんばって行くことであると思う。



バーベナ・テネラの咲くまち



井原まゆみさん

☆花いっぱい運動のはじまり

美しい花壇、窓辺のゼラニウム、花の公園……雑誌のグラビアや花の本でみるヨーロッパの花の景は私を魅了し、いつの間にか阿波町も花咲きみだれる農村でありたいと考えるようになった。そして、美しいまちづくりとふれあいの場づくりを目的に、私の仕事である公民館の活動として花いっぱい運動に取り組んだ。昭和五十五年秋のことである。人はいた。花好きの人集まれ！の呼びかけに五十人が集い、まずは講習会からスタートをした。モデルは北海道上

徳島県阿波町

井原 まゆみ

川郡美瑛町。美瑛農協の今野さんをお願いして、スライドや写真を送っていただき、それを教材に集落をまわる。意欲を高めるためのコンクールも同時に行い、家庭花壇を中心とした、伊沢公民館区の運動は次第に広がって行き、すばらしい花壇が次々と生まれた。一心地区では十五人の主婦たちが椋ノ木クラブを結成し、苗の交換や、空地を利用した花壇づくりをはじめた。

そうして三年が過ぎた頃、私たちは阿波町を大きく変えることになった一つの花に熱いまなざしを注ぎはじめた。

☆バーベナ・テネラ

出逢った花は
とてもかわいいたった
手折ってみると
今にもしおれてしまいそうなか細い茎をしていたのに



つきあうごとに
私たちを驚かせるような
強さと輝きを持っていた
何という名の花だろう
たずねた月日は重なり
やっと見つけた「バーベナ・テネラ」の名
その日から 私たちは
あなたに夢中になってしまった

町内のほんの数戸、そして私の家の庭にも十六年程前から植えていた、名も知らない小さな花がとても気になっていた。

春から秋冬まで花が咲き、夏の暑さもへっちゃら。うす紫色の群生は、ファンタジックで富良野のラベンダーを思わせる。だれに聞いても知らない。身近な園芸書を開いてもない。名をたずねて数年。やっと見つけた「バーベナ・テネラ」。和名は姫美女桜。バーベナの花ことばは、家族の和合（紅花）私のために折ってくださ（白花）であり、阿波町に一番多い紫色の花ことばがない。なければないでつくればいいじゃないかと勝手に付けたのが「ふれあい」

以来ふれあいの花で通している。小さな公民館のコミュニティ活動としてはじまった花づくりは、昭和五十八年の五月に町長の大きな掛け声のもと全町へと広がって行った。そして、バーベナ・テネラが全戸へ配られたのである。これは後の阿波町のヒット企画となった。

☆ルンルン母さん

助っ人父さん

さっそく「阿波町をバーベナ・テネラでいっぱいにすることが私の生きがいよ。だれが何と言ったって、ヤルワ」というガンバリおばさんが現われた。その気のお母さんたちも賛同して、「元町花の会」を結成した。

「ルンルン母さん、助っ人父さん。みんな仲よく花街道」

「できる人が、できる時に、できる事をしようよね」を相言葉に、やたら明るく行動をはじめて二年半。昭和六十一年十月には全国花いっぱいコンクールで、みごと内閣総理大臣賞を獲得したのだから、そのパワーと思入れはわかっていただけると思う。

阿波町内で、最初に花街道づく

りをはじめた元町花の会に続けとばかり、老人会や個人の作った花街道や花壇が目につくようになった。

人間は美しいものが好きだ。同時に自然の枯れゆくものにもやさしい感情を持っている。花街道づくりは道端の雑草をバーベナ・テネラに変えていく。植物の生態系を崩すことに心が傷んだ、でも町内のすべての路肩がこの花に変わるなんてあり得ないし、すみれやたんぽぽの咲くあぜ道もしっかりと残っている。私たちのまわりの汚ない部分だけを変えていけばいいことだとの結論を出した。

☆夢想祭

そんな動きの刺激を受けてか、青年たちも楽しい祭をはじめた。名付けて夢想祭。あなたの夢を実現してあげようというわけだ。

そもそもコトの起こりは、「風で空を飛ばしたい」なんていうチョットバカバカしいことを博子ちゃんが言い出したものだから、若者たちが悪乗りしてしまったのである。風せんは熱気球に変わり、台風接近の大雨などの悪条件を乗

り越えて、☆博子ちゃんは夢想人、☆三〇〇人のビックなお見合い、☆星空のデイト（昼間のデイトに変更）、☆牛一頭バーベキュー、☆カントリーコンサートなどのプログラムを目いっぱい楽しんだ。

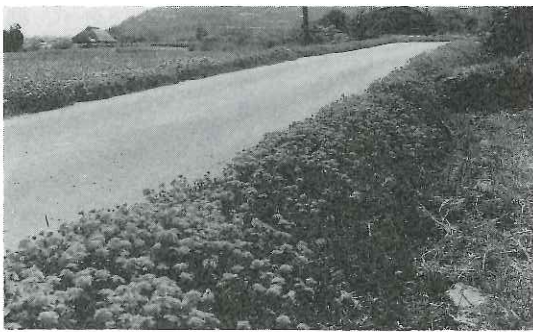
二年目は「お菓子の家」。三年目は「花馬車」とメルヘンチックな祭が続く。そして今年は「自動車レース」がしたい男の子の夢をかなえるべく準備に入っている。青年たちを応援しようと祭の日は一〇〇人くらいの人たちが助っ人役を引きうけてくれることもうれしう。

☆花という緑を未来まで

町内には、阿波町らしいイベントが次々と生まれた。初回の夢想祭のプログラム「三〇〇人のビックなお見合い」は行政とのジョイントで「ラブリーパーティー」へと発展した。言ってみれば集団見合いののだが、シャレっていてスマートである。

「花まつり」も二年前から始まった。花づくりの一日を楽しむ日であり、ミスバーベナテネラコンテストも開かれる。彼女たちのユニ

フォームもデザイン募集をして作り、手づくりのまちづくりは一つが物語となる。そしていよいよ私たちの成果を全国にむけてアピールしていくチャンス、国際花と緑の博覧会へ出展することを決めた。一つの花との出逢いからずいぶんと町は変わった。花街道づくりは郷土愛につながり、ゴミを捨てる人も少なくなった。花芸研究会や花の宅配をするグループも生まれた。一本二十円の低価格で全国の特に自治体の方々に喜ばれている。このような私たちの



西の岡花街道

歩みを総結集して花博出展プランを考えている。バーベナ・テネラの咲くまちづくりで培われた独自の運動形態とネットワークを紹介し阿波町のメルヘンチックイメージを会場で演出したい。

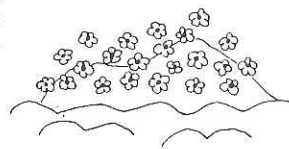
一〇〇ヘクタールの会場のわずか六〇〇平方メートルの阿波町出展場所が魅力的であたたかで生き生きとしていれば多くの人たちが注目し、関心を持ってくれるに違いない。そこから新しい出会いが生まれ、たくさんの方々ができ、そのネットワークを通じて、いろいろな情報がいってこくるだろう。

「美しいまちに住みたい。」とはだれもが思っていること。でもだれかがやってくれるのを待っているだけではいつまでも待っているしかない。阿波町は多くの人が動いた。まだまだ目標の半分も来ていないけれど語れる物語として成果が残っていく。花という緑を未来まで続けていくことによって、花文化のある風土をつくりたい。歴史に培われたあるヨーロッパの花文化のように。

花づくりにかける

今治市馬島

塩見勝太郎さん（取材／山本）



花みち

生業として花づくりを選んだ、今治市波止浜沖の離島「馬島」の塩見勝太郎さんを紹介します。

塩見さんは言う。「何でも金にしようと思うたら、それなりの努力が必要ですよ。そうでないと、生き残れませんよ。」と。趣味でやっている人もそれなりの苦労はあるうが、こちらは、生活をかけているんだ、という気概がひしひしと感じられる。

彼は、昭和五十二年大学卒業と



塩見勝太郎さん

ともに花づくりを始めた。本当は、高校を卒業と同時に花づくりをと考えていたが、ちょうどその頃、馬島は本四架橋の今治―尾道ルート来島大橋の橋脚の島となることとなっており、花づくりの先行きが予想つかなかったたので、とりあえず四年間様子を見るため、大学へとなったそうである。

しかし、石油危機により本四架橋は凍結され、その時点で花みちを歩むことを決心したのである。

今の農業後継者不足の折、自分から積極的に農業をやる、しかも瀬戸の小島の離島で、確固とした信念である。

本人は、島での花づくりにこだわった理由として、

○ ふるさと馬島が好きで、馬島の人が好きなこと。

○ 百姓が好きなこと。

○ 親をはじめ島の先人が守ってきた島を、しっかりと子孫へ受け

継いでいくという気持ちを常に持っていたこと。

を挙げている。これら考えの背景には、父親太郎さんの影響が反映している。馬島の公私両面のリーダーとして島を支え、昭和四十七年の電気導入でも仕事そっちのけで島のために尽した父親をみて、自らも父親のように島を支える人間になろう。そうでないと島がなくなってしまう。そういう思いが、生活を通して醸成されていたのであろう。

花づくりはサバイバル

さて、花づくりを生活の糧として始めた昭和五十二年から今年で十一年目を迎えている。生産額は年間一千万円、かすみ草、トルコききょう、ストックなど二十万本の草花を生産し、馬島の馬マークの花とブランド化し、信用を得ている。この間、彼はそれまでの果樹と花の複合経営に見切りをつけ、花専業農家になるため、祖父・父が残してくれていたみかんの木の伐採、客土の入れ替え、少ない土地を削って、車が入るように、今までの畑を区画整理し道を造った。

さらに、技術の習得のため、出荷先の松山市場でせりの手伝いをし、花の価格の動向や市場需要の特徴の把握などと、花市場情報の収集に励み、また、先進地である高知県に何度も足を運び、ノウハウの吸収に努めた。

彼は言う。「自分は一匹狼。努力しなければ蹴落とされる。本当は、単品のものを数多く生産したいが、市場にかわいがってもらったためには、市場が要求するものを作っていく。だから、小量多品種生産にならざるを得ない。現在は、品種も比較的定まってきたが、数年前までは、やれるものは何でもためしてきた」と、置かれている立場の厳しさを語ってくれた。

十一年間の苦労、特に昭和五十七年、五十九年の二回の大雪を経験し、露地ものが全滅しても、不屈の精神で戦ってきた。まさに、激闘の日々であった。大雪のたびに、露地栽培からハウス栽培中心の施設園芸に切り替え、現在では二十棟、約八〇〇坪のハウスを擁している。

花づくりという、いかにもきれいなイメージであるが、その労

働はハードだ。春の彼岸の時、夏のお盆の時などは、収穫に追われ一日二、三時間の睡眠しかできない日が続くこともあるそうである。特に、本土と違い島というハンディにさらされている。本土と同じことをしては生き残れないのである。

彼は言う。「人に負けんものを作らないかん。人並みに遊んだり寝たりしたらいかん。島のものの意地、本土の人には負けたない。ハンディを克服するためには、人より余計にしんどい目をせにゃいかん。海上の運搬にも手間がいる。フェリーもない。水も少ない。だから、コストダウンもする所はせにゃいかんが、少々高くついても、その分高く売る。十人並みでコストを下げるのではなく、元がかかってでも良いものを使ってみる。例えば、高い肥料を使ってみる。ハウスのビニールも毎年毎年新しいものを張り替える。良いものを作って信用を伸ばす。」と、様々な挑戦や取り組みが淀みなく口から飛び出してくる。十一年間やって来た自信と信念が表情を作っている。

花づくりへの思いが、迫力となって押し寄せてくる。真黒く日焼けした笑顔にほっとしながらも、したたかな思いを感じとった。

問題点と展望

周囲三・八km、人口三十九人（六年国調）の馬島、定期航路はあるものの、小島であるがゆえに問題点も多い。

第一に水不足。飲み水は船が運んで来るが、その他は、島に二カ所あるため池に頼っている。花は水を極力節約した栽培方法を取り、水が少なくてすむ花を中心に栽培している。水が少ないため成長に時間がかかる。今は、水がないことを逆手にとって、花をいじめて

鍛えている。却って花の持ちが良く喜ばれている。少ない水での栽培方法を身につけているのだ。

第二は、運搬の問題。フェリーがないため、出荷は自家用船で波止浜まで持っていく。さらに施設園芸につきものの連作障害、その防止には土地を生まれかえらせる必要がある、そのために堆肥を入れる。牛糞やワラなどを袋づめてして自家用船で本土から運んで来る。フェリーがないことが、どれほどの手間を生んでいることが、彼はフェリーの就航を切望してやまない。

第三は耕地の問題である。土地はあるが、ハウスを建てる耕地がない。日照量や水との関連があり、どこにでもとはいかないのである。土地ができれば一部の土地を休ませ、連作障害を防ぐことができるのである。

これらの問題点はあるものの、彼の花に対する信念はゆるぎない。これら課題を逆手にとって、したたかに生きている。

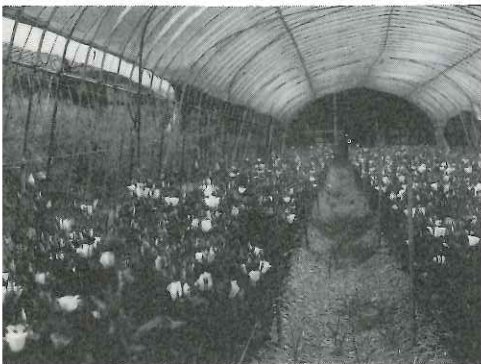
彼は、雑誌「しま」の中に自分の花づくりサバイバル体験を寄せ

て、結びにこのように書いている。

「しまづくりやむらおこしは、まず花火を打ち上げる前に、自分の生活基盤、経済基盤を築くことが大切である。と同時に、一人一人が力強く島に村に根を張って行けば、自ずと島が村が活性化されるのだと信じる。島人として自覚を持ち自信と誇りを持つ。」と。これは、一離島「馬島」のみならず、過疎の町村にも、市部の辺境の人々にもあてはまると思う。来島大橋の工事も既に始まり、馬島を取り巻く状況も大きく変わろうとしている。馬島の花は、彼の花に対する愛情と思いがある限り、ずっと続いて馬島を発信していくことだろう。



馬島の花

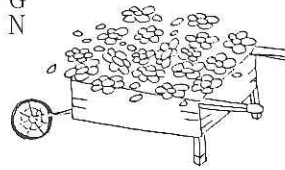


温室の花々

暮らしの中の花々

ETSUKO FLOWER DESIGN

上岡悦子



フラワーデザイン？

フラワーデザインって一体何のことだろう。フラワーデザイナーとは？と疑問に思いになられる方も大勢いらっしゃると思います。ウエディングの時の花嫁の持つ生の花のブーケや髪飾りがそうであり、リビングに飾るフラワーアレンジメントやブティックのディスプレイの花、パーティー会場のテーブル花、テレビのトーク番組のバックによく映っている大きな生けこみ、みんなフラワーデザインのジャンルであり、フラワーデザインの仕事でもあります。それともう一つ大きな仕事にフラワーデザイン教室の講師という仕事があります。私の教室にお見えになっている方々、上は五十代から下は二十才すこし過ぎた方たちまでほんとうにいろいろな女性の

方たちがこつこつとでも楽しみながらコサージュを作ったり家庭で楽しめるアレンジメントやプレゼントにできるお花の勉強にいられています。そして時にはPTAのお母様方の会やら企業のカルチャー教室にも出向くことがあります。そこでいつも私が声をからし(?)皆様をお願いすることの一つに、「花は生きています。だから美しいし、高いのです。どうか生命を大切に下さい。」という事です。若いお嬢様方の中には、自分の使わなかった花材をチョキチョキとハサミで切り、ごみ箱の中へポイなどということもめずらしくありません。「あっ！待って」と私はそのつぼみを取り出し、小さなガラスの中に生けてあげます。それからその花はもう一度命を取りもどし、何日かは私たちの目を楽しませてくれます。

花も木々も自然界のものは、自然界の中にあるのが一番自然であり、美しいと思うのですが、その美しさに人間の手を加えることによってもっと美しくもって人間に近いところにしてくれる、そう考えるのがフラワーデザインの考え方のような気がします。

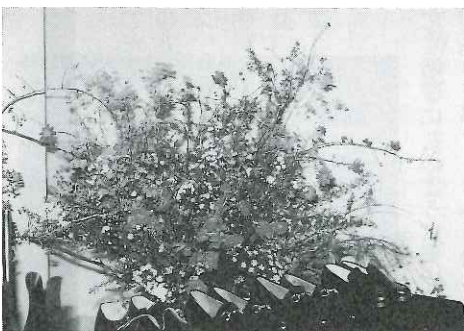
フラワーデザインの展開

都会のど真ん中のフラワーショップでは野草が商品となり、どんどん売れているという今日ですが、まだまだ自然のたくさん残っている地方ではそれは遠いことのようにです。が、またそれだけ都会の人たちの自然への愛着とか郷愁とかが強くなっているということなのかも知れません。都会で暮らす方たちの間では、今や建物の中に木を使い、花を飾るということが一番ぜいたくで、余裕がなければできないことのようにです。

外国の写真や映画で、街の窓やテラスに花が咲きあふれている光景をたくさん見た方々も多いことと思います。個人主義のとて強い欧米諸国で、窓の景観は人様

が見て下さるものとの考え方で、街によっては鉢植えの花の色まで指定しているところがあると聞きました。家庭の中を美しく飾ったりということとはどこの国でもあたり前のことです。屋根の色や建物の高さを決めてしまったり、ペランダの花まで決めてしまったり、ちよっと日本では考えられないことですが、それだけ街を美しく保とうとする姿勢は見習うべき点が多くあるように思います。

千葉県丸山町というところで、昨年、地元で栽培されている花を使用して町のイメージ向上をはかるとうとするフラワーイベントが開



花のディスプレイ

されました。役場前で農具の一つ田舟を花器にしてフラワーアレンジを創りあげたり、菜の花とミモザを生けた二つの穂を天秤棒の両端につるして案山子の肩に乗せてみたり、それはユニークで楽しい企画です。ここまで大がかりでなくともっともつと生活の中に何げなく花や植物が取りこめたら：と願うのは私一人の気持ちだけでは無いと思います。

子ども部屋には必ず花を置きたい。とよく言われますが、子どもの柔軟な心には感動することや美しいものを見て育ち、生命あるものを大切にするということなど、大きな教育になるからではないでしょうか？

大量の花を使った大きなアレンジメントだけがフラワーデザインではありません。ギフトに添える花の色を自分で決め自分で選ぶこと、木綿のワンピースにちよつとつけるコサージュを自分で作れること。野に咲く花や自宅の庭に咲いた花を少しだけおしゃれに生けられること。そうしたささやかだけれど、でもとても大切な日常の：

生活の中にあるフラワーデザイン。これらをいかにより多くの方に知っていただけるか、というのが私たちの役目のような気がします。

お花好きですか？

よく、「私は不器用だから…」とか「センスがないからできないんです」という言葉を生徒さんた



フラワーデザインのレッスン風景

ちが口にしますが、確かに少しはそれらの要素が必要な時もあるかも知れませんが。でも根本は「お花が好きですか？」ということ。どれだけ花や木々や実や葉に愛情を持った目を向けてあげられるかということにしか行きつかないと思います。それをもっとつきつめる

とするならば、感動する心を持つているかどうかの違いではないかと思えます。きっとそういう方は、青い空を見ると「あー気持ちがいい」と思わず背のびをするだろうし、コスモスが風にそよぐ風景を見れば「なんてきれいなんだろう」と感激するだろうし、すべてのことを興味を持った好奇心いっぱいの人だろうと思うのです。

フラワーデザイン的であるということは、個性的であり、遊び心つまり余裕があり、柔軟性があり、感動する心を持っていること。なぜかこれは「素敵な人であること」に通ずるような気がします。

何の記念日でもないけれど御主人が帰り道に花束を奥様に買って帰る。そんなコマージュシャルがありましたけれど、それが普通のことになるくらい、花の贈り物が当たり前になればほんとにフラワーデザインというより花自体がしつかり日本の生活の中に根づいたことになるような気がします。

生活習慣、歴史、宗教などすべての点で違いの多い西欧諸国のフラワーデザインすべてが、日本に

即取り入れられる訳もなく、又必要のないことですが、どんな生活様式が変化し多様化している今日、今の日本にふさわしい新しいフラワーデザイン（いけば花とも融合しあった）が見直され、広まりつつあるようです。

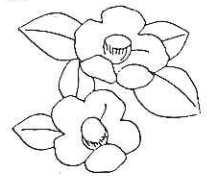
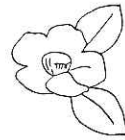
子どもの頃、れんげ畑で摘みだてのれんげで首飾りや頭飾りを作ったこと、あれがフラワーデザインの基本であり出発点なのです。もう一度身近の花や草や木々を見直してみて下さい。そして観察してみて下さい。きっとまた違った世界が広がることと固く信じています。



上岡 悦子さん

昭和二十九年松山市生まれ
エッコフラワーデザイン主宰
フラワーデザイナー及びフラ
ワーデザイン教室講師

つばきへの想い



まちの花

小松町は、西日本最高峰標高一九八二メートルの石鎚山系の美しい自然を背に古くから城下町として栄えてきました。

年平均気温は一六度、南北に一六キロメートル、南端の高度は石鎚山の一九八二メートルで傾斜が急で、山間部と平野部の温度差が著しい。同一地域でも寒暖の差は大きく、おだやかな瀬戸内海地方のイメージとはやや異なった自然環境と思われます。

そんな自然環境の下で多くの植物の中でも、椿は夏の雨上り後に



佐伯 隆さん

小松町住民福祉課

佐伯 隆

は葉が照り輝き、冬には花咲き春の訪れを感じさせてくれます。

椿は町内の藪の中に、大、中、小輪の一重、八重の、紅色、桃色、白色等々、ごく最近まで簡単に採集できるほど、身近かにありました。

小松町は変化に富んだ多くの椿を生むすぐれた気象、地質と思われます。

加えて、藩政時代、東予地方の商業、宗教の中心的存在であった村の人々は競って文化の導入に努めました。

多くの珍しい椿が、二十を越える寺や庄屋に植えられたのもこのころです。

現在当地にある老木はこのころのもので、歴史を語る数少ない木として印象深く思われます。

春のボタンの法安寺、冬は椿の仏心寺と言われるほど円覚山仏心

寺境内には名椿 あかしれん “明石蓮” があります。

椿のあしあと

藩政時代の歌集、琴歌玉椿に「見るたびにあかぬ色なり足曳のかた山椿、今ぞ咲く花に心を越の雪その初嵐あかしれん」と詠まれた椿です。ところが実在の木が見当たらず愛好家の間で「幻の椿」とされてきました。その珍木が我が小松町ですくすくと育っていました。仏心寺の「明石蓮」の樹齡は三百年以上で十一月ごろから咲き初め三月まで見られ開花期が長い。大輪で柔らかい花卉、紅のきれいな花を咲かせます。

通常の椿は、すぐにポロリと落下します。これは椿の花には他の植物の花とくらべて比較的たくさん蜜があり、小鳥など好んで集まってきます。甘い蜜の出る部分はそれだけに病原菌などが入りやすいのです。自己防衛でしょうが、いともさっぱりと花を落します。これを「首が落ちる」として忌み嫌った小松一万石の武士たちにとって、長く咲く「明石蓮」だけは

「別格」と映ったのかもしれませんが。その昔、武家屋敷だった旧藩内でこよなく愛されたといわれます。そのほか町内にはすてがたい名椿があちこちにあります。

「花よ舞え」と思わず言い寄りたい「胡蝶」娘の振り袖に描き正月の晴姿としたい思いにかられる「小松姫」。不運にも他所に移植され消えていった「キャプテンロ」の太木の数々。

時は少し過ぎて、藩政後期、伊予聖人と呼ばれた近藤篤山は、宇摩郡小林村（土居町）生まれの朱子学者でした。小松藩一柳頼親公（七代）に招かれ、文化三年（一八〇六年）に藩校を開設しました。その後四〇年余り、藩士だけでなく商、農家の子弟の教育にもひたすら専念しました。小松町旧藩にある庭園は、書斎とともに今も



2～3年生苗の移植

そのままのたたずまいで残っています。近藤篤山邸（県指定文化財）の庭園にある「篤山椿」も三月、旧邸に白い端正な姿を見せてくれます。植物学者の故八木繁一氏が伊予五大椿の一つに選んだ名椿です。

第二次大戦後は、小松町大頭の故菅吉暉さんによる椿樹の導入を見のがすことはできません。菅邸はその昔庄屋で、重厚な玄関をくぐると、葉が触れるほど緑がいっぱいです。邸内は約三〇アールで庭一面を椿の花が彩る椿屋敷です。その数約二百種いづれも菅さんが集めた名椿ぞろいです。菅さんは、京都大学法学部卒業後、京都府内の銀行に勤務しておりました。京都府内の椿愛好家で結成する京都園芸倶楽部の会員で椿に対する執着と愛情は人一倍でした。

邸内には、京都産の名椿も数多く「有楽」もその一つです。樹齢は五〇年ぐらいで京都・東山区の月真院産の椿で花は一重の小輪、筒咲きで花期は十二月から四月と長く淡い桃色の花を咲かせます。千利休門下の七哲の一人といわれ

小松町の名椿



「篤山」

「有楽」

た織田有楽斎（一五四七—一六二一年 信長の実弟）が茶花として愛したことからその名がつけられたそうです。町内の椿愛好家は今も菅さんを「愛媛椿界の元老」と敬愛しています。

「つばきの町」づくり

このように連綿と続いた町民のつばきへの想いを、より具体化するために、小松町は「新総合計画」

の目標である「豊かな文化環境をつくる」一環として、全国に誇れる「つばきの町」づくりをめざしています。

老人クラブを中心に勉強会ですでに六回開催しました。苗木も新しく約一八〇種購入しました。町内の名花を掘りおこしながら一万本計画の初年度として三千五百本の挿木を終え育成しています。三年後には町内の三千四百戸の全家庭や公園に植樹し新しい時を迎えようとしています。現在は、後世への香り高い文化継承の時です。小松町老人クラブ連合会（会長 寺村毅 会員一二〇〇名）と学校、行政の官民一体となった毎回三時間の勉強会は希望と夢にあふれています。

椿は何百年と成長し続ける長寿の樹木です。それ故、多くの人々に觀賞してもらえます。自分が栽培し楽しむ期間よりはるかに長い期間、後世の人々に觀賞してもらう宗教的な無償の心をかなえてくれる樹木です。

今、植えるという行為は、必ずや、将来陽報をもって答えられる

でしょう。想いをこめて植えられた幼木を、玄関に飾られた一輪の椿の花をみると、小松町は椿の生育に天与の恵みを受けた町と写っています。

今年も、十一月の「明石蓮」の開花から初まり、十二月には「有楽」がピンクの花弁を緑の木々の間からみせてくれます。一月には「藪椿」「小松姫」、二月には「白玉椿」、そして四月上旬仏心寺の椿祭のころには純白の「大城冠」を塀の向こうに、藪の端々に見ることが出来ます。苔むした庭に落ちた花びらを集める平安な後姿をみることもあります。

来春、我が家自慢の名椿を持ち寄る町内あげての一輪さしの展示会と老人クラブ婦人部手づくりの椿もちの製作を開催する予定です。近い将来には小松町が一望できる中央公園（広さ六町七反）に日本の椿、世界の椿の植栽を夢はふくらみ、少しずつ実行へと移されています。

椿と人との出会いの町をめざして、多くの方々のご来町を町民一同心から歓迎いたします。

花は咲きます

双海町まちづくりエプロン会議



エプロン会議誕生

双海で、まちづくりを打ち出したのは昨年とのことでありました。町長さんいわく「六十二年度をまちづくり元年と定め、二十一世紀を指向した新しい町を、町民の智慧と力で築こう」ということで、個性と魅力ある双海町づくりを進めるため、①人づくり、②拠点づくり、③町民総参加の日本一づくりを柱とした新しいまちづくりが始

二宮 三重子

まったのです。そこで町は、双海町まちづくり組織をまちづくりフォーラム二十一と名付け、双海町まちづくり三〇人委員、青年会議三〇人、エプロン会議十二人の三つの組織ができました。私はエプロン会議の中の一人です。

まちづくりを目指してエプロン会議は何をすべきか、年令二十八才から五十二才の十二人、主婦である私達は頭をかかえました。

まず、女がまちづくりを進めるとしたら、何を手がければ良いのか話し合いました。子供・花・ゴミ、色々出された中で、花を選び、まちを美しく花でかざろうと言うことになりました。

阿波町に魅せられて

では、何から始めればと具体的になって来ると、又迷いましたが結局、花いっぱい運動の先進地を

見学する事になり、徳島県の阿波町に参りました。

町役場総務企画係長の井原まゆみさんの説明を受け、現地へと向いました。道路の両脇・家の庭・バーベナ・テネラの花がいっぱい！本当にきれいでした。地域をこんなに花いっぱいにするには、人を中心に動かしていくかなど様々の苦労があった事をまず思いました。

十二月の寒い日、役場の若松さん、早崎さんと、エプロン会議のメンバーで、下灘地区の線路の土手を切り開き、ライオンズクラブから戴いた菜種をまきました。定期的に育たなかったらと不安もありましたが、春を待つことにしました。

そして六十三年を迎え、三月五日六日に、双海まちづくりシンポジウムが開かれました。

その中の基調講演で、「バーベナ・テネラの咲く町からの発信」徳島県阿波町の井原まゆみ先生の講演を聞き、私は感動致しました。女の一人の心と力が、町を花で埋めつくす心意気、全国に花の町阿波町の名を広げたと言う先生の話

に、今まちづくりが語られる双海に、私達婦人の合言葉で花にかけて見てはどうだろうと、その時思いました。

翌三月七日は、上灘下灘地区合同の婦人学級の日、時を期すと言うのでしょうか。昨夜ねむれなかった、まちづくりの思いを、皆さんに提案致しました。シンポジウムの翌日のこと、参加された方も多く、井原先生の講演に心打たれた人は、私以外にも沢山あり、まちづくりを多くの人が思っていて下さることを知りました。

早速皆さんに投げかけますと、すぐに賛同を戴き、婦人会でバーベナ・テネラに取り組むことになり、下灘地区婦人会、久保会長と共に、善は急げとばかり町長さんにお願いに参りました。

「まちづくりバーベナ・テネラの花を、婦人会の手で広げ今婦人会員が減少しつつある中で、町に花を咲かす役割を持ち、そのことが町の人々の心に花咲く原動力になるとしたら、私達婦人の役割が果たされるものと思うのですが、町長さん花の苗を補助しては戴け



エプロン会議のみなさん
(右から二番目が二宮さん)



きれいに咲いたバーベナ・テネラ

ないでしようか。」と申し上げ、私達の不意の訪れにもかかわらず、心良く了解をして戴き、一万本の苗を買っていただく事になりました。

いざ取りくむことになりましたと、やはりそれぞれの意見もあり、阿波町のまねをそっくりするよりも、双海にあるつわぶきとか野菊をしてはどうかと、婦人会はそうではなくても用事が多いのに、花づくりにまで手を出さなくてもいいのではないかと、色々な意見がありました。最終的にはバーベナ・テネラを植えることになりました。何故バーベナ・テネラにこだわったかと言いますと、この花は咲い

ている期間が長く、繁殖力も旺盛であることに魅力を感じたのです。又、五月から十二月まで咲きつづけると言うのです。七・八ヶ月も咲きつづける花なら、町民の誰にでも見てもらえる利点があります。私達は、年中花咲く町を提唱して、心の優しい地域と、美しい花の町をつくるのが目的であり夢なのです。

地域を良くするための花であれば、上灘、下灘にモデル地区をと言うことになり、国道三七八号線の一面を選び上灘は小網部落になりました。バーベナ・テネラを植える前芝けずりなど大変な仕事でしたが、老人クラブの方達も応援を戴き、花は一本一本丁寧に植えられ、婦人と老人の暖かいふれ合いも生れ、このことがもしかし、まちづくりなのではないかと、私は思いました。

花が育てた女性の

まちづくり

今社会は、婦人の力を多く求める時代に来ており、人が集まる所から、ものごとが掘り起こされ生

活が高まるものと信じますし、その町の婦人がより婦人らしく、女らしく、母らしく生涯、命と心をはぐくむ所にするためにも、夢を広げてゆきたいのです。

その夢は今、少しづつ広がりを見せ始めました。バーベナ・テネラの花の苗は婦人会員の手ゆきわたり、老人、子供にと手渡されてゆくでしょう。やさしい婦人の手によって、花の輪は確実に広がっております。

昨年の冬蒔いた菜種の花が四月のなかばには、多くの人の目をひき、愛媛新聞の夕刊にまでのる程の見事な花畑になりました。その土手に立った時のエプロン会議の感激、私の感動、ここに書き表わす事は出来ません。

今年八月、婦人で広げる花の町双海は、海岸通り、山の道、至る所に、バーベナ・テネラの可愛い花が、人々の目に心にとまってゆきます。花は美しく人の心に呼びかけてくれます。まちづくりは、人づくりであることを、花に取りくむことによって知りました。そしてこの花は、まちの人々と共に双

海の姿をかけてゆくことでしよう。私達のまちづくりは、常に続けることによって、又心を動かすことによって、広がりを見せると思っています。婦人会が、花に取りくんだ時から、町は少しづつ変化しつつあります。私自身、エプロン会議を通してまちづくりの始まりを知りました。

これからは、母と子いっしょに花を植え、育てるよろこびを、子供にも若い母親にも知ってもらい、より美しい双海、より住み良い双海を目ざして、何時までも、愛するまち、愛される町を目標に生きたいと思っています。何時か、花の町双海町が、観光客の訪れを見る様に、がんばりたいと思っております。



秋の桂川はコスモスがいっぱい

玉川町 桂

井出 清隆さん（取材／山本）



井出 清隆さん



くる回転しながら落下させて遊んだ思い出、また、幼なじみのみよちゃんへの恋占い、花弁を一枚一枚ちぎり、好き嫌いと繰り返し、好きで終わって喜んだ思い出。そんな世界をイメージするのである。

「コスモスのイメージ」

コスモス、漢字を当てると「秋桜」秋を代表する花である。花とばは、「乙女のまごころ」可憐なイメージである。

道端や家の軒先などで秋風に揺れる白や赤やピンクのコスモス、澄きった空気、空には赤とんぼ、何か童謡・メルヘンの世界に誘う感じがする。

小さい頃、学校の帰り道、コスモスの花弁を一枚おきにちぎり、空高く投げる、秋風に乗ってくる

「コスモスへの想い」

今治市の中心部から国道三一七号線を南東に十分ほど走ると、蒼杜川に沿って、緑といで湯の町、玉川町が広がる。この辺りは近年、今治市のベッドタウンとして都市化が進みつつあるが、少し入ると、まだまだ農村地帯である。さらに数分走ると、左手に堂々たる建物が姿を現わす。玉川近代美術館である。昭和六十一年十二月に完成し、ピカソの「横たわる裸婦」などの名画が一四〇点展示されている。ここの事務長さんが、桂川で

コスモスの世話をされている井出清隆さんである。

柔和な顔に笑みを浮かべながら出迎えていただいた。人々が忍ばれる。単刀直入にコスモスへの想いのほどをお伺いした。

井出さんは開口一番こう言われた。「何もそんな想いはないんですよ。自分が好きでやっていて、きれいに咲いたらうれしいんですよ。それを見に来てくれる人に喜んでもらったら、それで十分ですよ。」と、気負いはない、淡々としたもので、謙虚である。自分が好きでやっていることから、認めてくれることはうれしいが、目立つことは、どうも面はゆいという感じである。

花づくりは、地道に自分の趣味としてやっている場合が多い。新聞等に取り上げられることによって、上ついた気持ちになることを心配されるのだろう。

「コスモスの苦勞話」

コスモスは井出さんが住んでおられる桂地区を流れる桂川（別名

大野川）の両岸五〇〇メートルの距離に、四〇五、〇〇〇本植えられている。見ごろは十月上旬頃だそうである。

コスモスの世話について、いろいろと御苦勞話をお伺いしてみた。好きだから、大した苦勞ではないとおっしゃるが、何もしていない。我が身には、とてもできることではない。

まず花の季節が終わると、十二月には、かれた枝葉を刈り、一月から二月にかけて、それを焼く、さらに四月には、新芽が密植状態に育ってくるので、良い花を咲かせるために、大きな幹の苗を選んで一メートル間隔に移植する。五月末から六月にかけては、雑草刈りと幹が倒れないように支柱立てを行う。七月から八月には、三日か



ら四日おきに水をやる。そして、九月下旬やっと花の季節を迎える。忙しい日々の連続である。

四月の移植、一本一本植え替えをしなければならぬ。支柱立ても、材料の竹の切り出し、杭打ちと続き、夏場の雑草取り、草の伸びも早い。さらに水やりも、川の水がほとんどなくなるので、川の擁壁部分を流れる農業用水路のわずかの水をバケツで両側のコスモスへ投げ上げる。高い所は、数メートルにもなるので重労働だ。水の蒸発を防ぐため、夕方を利用するのだそうだ。また、擁壁が熱くなり、照り返しもきついと言われた。最近では、花の世話だけでなく、できるかぎり川の美化にも気をつけ、ゴミの処理、土砂の取り除きなども、いっしょにやっているそうである。

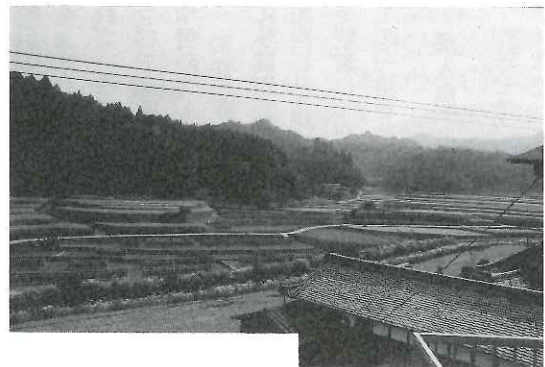
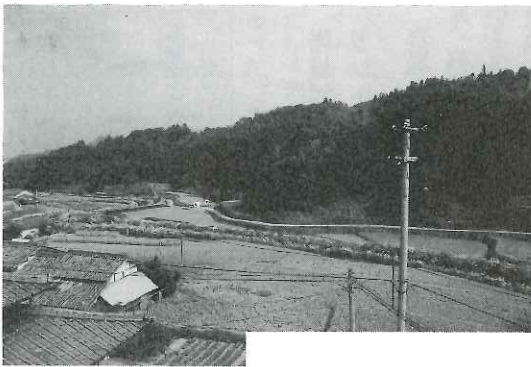
「コスモスからの展望」

玉川町は、鈍川温泉や玉川ダム
の桜、鮎川里のマンジュシャゲな
ど花の名所はあるものの、町全体
を見渡すとほとんど農山村地域で

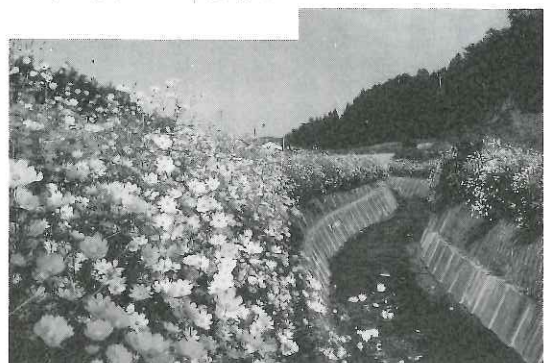
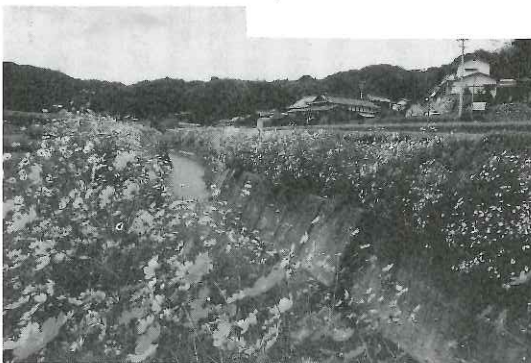
占められ、緑いっぱい町である。いたる所に花や緑があり、日常見慣れているため、都市部で最近ブームである花や緑を生かしたアメニティの関心は、まだ、薄いように思う。しかし、囲りには美しい花や緑があるからこそ、これらを生活の中にもっと生かすなり、観光資源として開発するなり、地域を発信する手段として、一考に値すると思う。

ことしも、このリポートが出る頃には、きれいなコスモスが桂川の川畔に咲き乱れているだろう。しかし、この美しい花の陰には、一年中この目のために、黙々とお世話をする井出さんがいらっしやることを、心のすみにでも留めていたいものだと思う。

コスモスに想いをこめた井出さんのますますの御精進を祈念し、結びといたしたい。



桂のコスモス開花風景



この夏無人島が燃えた!!

えひめ地域づくり研究会議

運営委員 原 博彦

八月十三日、無人島の津波島に約三千人の人達がつめかけた。

津波の夏まつり（無人島からのメッセージ）に参加した人々である。熱帯低気圧の影響で荒れ気味の天候もスタッフ一同の祈りが通じたのか小休止、夏の日ざしは多少弱くとも島は皆んなの熱気でムンムンとしていた。

島の活性化

島の経済は近年造船関連の不況、柑橘の価格低迷と苦境に立たされ、この危機を克服すべく村は地域活性化対策の必要に迫られた。造船関連産業の不況が続く中、離島がゆえの企業誘致の難しさを考えれば、従来からの基盤がある第一次産業の農業と水産業の活性化であり、また、これらの産業に付加価値を生み出す第三次産業、すなわち観光面への戦略も必要である。その第一弾がレモンであった。新



原 博彦さん

鮮で安全な国産レモンの産地、地図にも載らないような小さな島をレモンの香りで包み込み、夢とロマンを与える島のイメージアップ作戦を開始、キャッチフレーズは「青いレモンの島、いわぎ」である。

活性化対策の第二弾として、村と村内経済団体（農協、漁協、商工会）との共同出資による株式会社「いわぎ物産センター」を設立し、人と物の交流を目的に、特別島民制度「青いレモンの島」友の会が発足したのである。

そして、第三弾がコミュニティ・アイランド事業による交流の場の根拠地づくりであった。



岩城村コミュニティ・アイランド津波（つば）

岩城島の南約2kmに浮かぶ津波島、面積約四五ha、周囲約5kmの小さな無人島である。県の自然海浜保全地区にも指定された美しい砂浜のある島で、毎夏、海水浴客、キャンパーが自然を求めて大勢訪れている。

村では昭和六十一年度、六十二年の二ケ年でコミュニティ・アイランド事業を行い、この津波島に多目的広場、キャンプ場、テニスコート、レストハウス等の施設を整備し、交流の場の根拠地としての一步を踏みだしたのである。

無人島でのイベント

昨年七月、「サマードリーム、イン津波」と題し約三百人が和太

鼓、バンド演奏、キャンプファイヤーを楽しみ、また八月には、「サマーチャリティーコンサート、インブルーレモンアイランド」を開催、アマチュアバンドの競演で約六百人の若者達が集った。

そして無人島でのイベント第三弾が今回の「津波の夏まつり」の開催であった。

夢みる会の誕生

これまでに村内で行って来たイベントは数多いが、各種団体がこぞって参加するイベントが行われるようになって来たのはごく最近のことである。例えば、一月の産業展と駅伝大会の同時開催、ドッキングすることにより参加者数が倍以上になったのである。

実行委員会の母体となったのが「夢みる会」であり、この会は昨年夏の津波島で開催されたチャリティーコンサートが発端となった。商工会青年部の有志が中心となり開催したコンサートは本村の民間主導型イベント第一号と言えた。彼達はブドウ糖の注射を打ちながら頑張った。そしてこのイベント



島を訪れる人……人!!

の反省会の中で産声を上げたのが「夢みる会」であった。最初のメンバーは二〇名たらずだが、メンバーの職種は様々で岩城村（島）の再発見をテーマにしての発足であった。

不定期ではあるが会合を重ね、夢を語り合い、「夢みる会」が参加した最初のイベントが今年の桜まつりである。商工会青年部、婦人部と夢みる会のメンバーが中心となり桜まつり実行委員会を結成し、桜まつりを運営することになったのである。ところが桜まつり当日桜は蕾のまま、しかし実行委員会のメンバーのアイデアで催し物も多く、参加者（特に村外）は桜まつり始めて以来の賑わいとなった。実行委員会のメンバーは反省

点もあるが、チョッピリ自信もできたのである。

津波の夏まつり

桜まつり実行委員会発展的解消、次回は新たなメンバーで出発することになったが、解散するや否や昨年夏のコンサート出演者から接触があった。

夢みる会のメンバーには昨年のコンサート開催経験者がほとんどで、気軽さも多少あり準備に入ったのが五月末、各分野から約四十名が参加して、コミュニティ・アイランド施設の有効利用と、島の素晴らしさを宣伝し、岩城村の知名度を高め、交流の場としてのイメージアップを図り地域の活性化に寄与することを目的として、

「津波の夏まつり'88実行委員会」が発足した。役員の構成は、委員長（ガソリンスタンド経営）、副委員長（スポーツ用品店経営、役場職員）は二名、総務部長（商工会職員）、第一事業部長（コンサート部門担当（役場職員）、第二事業部長（バザー等他のイベント担当（土木建設業））、その下に細部の

この夏、 瀬戸内海の無人島で新体験 オールナイトフェスティバル!



担当者が集まり、連日深夜におよぶ会合が続いた。

開催日、八月十三日でオールナイト、新盆のころもあり、各方面から反対意見もでたが今後の島のあり方等を鑑み決定。また、無人島に村の人口（二、八五〇人）以上を集めることを目標に、準備期間があまりにも短かすぎることは承知の上でスタートしたのである。委員会のメンバーの合言葉は「とにかくやってみよう」であった。総事業費が一千万円を越すイベントをゼロからやろうと言うのだから無謀とも思われる面も多々あった。でもそれらを乗り越えることができたのはスタッフの熱意と周囲の人達の協力である。

計画がスタートした時点で批判的であった声も徐々に応援歌に変ってきて、スタッフ一同を大いに勇気づけてくれた。

当日、昼前から地曳網やバーベキュー、宝さがし等のイベントが始まり、午後四時半、子供太鼓を皮切りにオールナイトコンサート開幕は上った。田中 健・上田正樹が出演した十時過ぎに会場はピークに達し、はびるサウンドに乗って踊る人の群れ、ペンライトが無人島にホタルの集団発生を思わせ、不夜城と化したのである。

夜が明け始めた午前四時過ぎコンサートは終り、最後まで踊っていた若者達も去り、島は静けさを取りもどした。八月十三日から十四日かけて無人島は燃えたのだ。

島始まって以来のイベントを支えたスタッフは約一四〇名、村内外を問わず各方面の人達から協力してもらいすべてがボランティアである。役場職員も全員参加、女子職員は深夜の一時過ぎ、男子職員は徹夜で頑張ってくれた。

ここまで漕ぎつけられたのは人の和であり、郷土愛であったと思われ。今後イベントの精算が進むと同時に数多くの反省点が出てくると思われるが、我々の意識改革の一翼にはなったと思う。

木造建築の再開発を目指し

「ミニ木」のフォーラムを開催

久万町

久万町役場 中岡 登

久万町で、去る八月二十七・八日の両日、「木造建築の再開発とネットワーク」をテーマに「ミニ木のフォーラム」が開かれた。このフォーラムは、久万町、愛媛県まちづくり総合センター、えひめ地域づくり研究会が主催したもので、県内の市長村、森林組合、建築関係者約五十名が参加した。

来る十一月十二・三日に全国規模の「木のフォーラム」が計画されており、今回は問題提起のためのミニ木のフォーラムであった。以下会議の概要を紹介するものである。

―木材の需要拡大は町の優先課題―

町長は、基調報告で「私の町は、林業の町で林業振興は、町の最優先課題です。この木のフォーラムが木材需要拡大の一助となり、引き金となればと思っています。日本古来の伝統ある木造建築の良さを知ってもらい可能な限り、公共施設は木造でやって欲しい、そんな願いをこめています。」

林業生産の町が、鉄筋コンクリートの施設を建てていたのでは、そんな気持ちから木にこだわり、公営住宅、小学校、美術館など実践しました。しかし、三十年余りの木造離れの経過の中には数々の問題点が生まれていたのを知りました。

主な問題点としては

- 一 特に大型建築の設計・施工技術者の少ないこと、老令化していること。
- 二 特殊材（六メートル以上）など加工する製材など極めて少ないこと。
- 三 用材確保特に乾燥材調達のむづかしいこと。

四 大型建築の場合単年度事業ではむづかしいこと。

などが報告された。

続いて、飯塚五郎蔵昭和女子大教授が「なぜいま木造建築なのか」をテーマに講演。同教授が設計した

集成材による大型建築などスライドで紹介。

「RCと木造とがバランスのとれた混合構造を考えてみるのが軸組工法の将来につながるのではないか」と話された。

午後のパネル討議には、猪瀬



―時代にマッチした木造建築を―

猪瀬「久万町が、育林体系をつくり良質の柱材生産を目指したその成果を、表示するため今曲り角に来ている。伝統ある軸組工法の継承に取り組もうとしている。『木造建築の再開発』について、パネラーの先生方のお考えをお伺いします。」

杉坂「木にこだわり続けて三十年余りやと明かるいさざしが見えて来た。在来工法で国産材をふんだんに使った住宅の建前を見て、プレハブ住宅の人は、ビックリしている。私の設計を新潟で地元の大工さんの手で切組みし、トラックで東京近郊に来て建てる方法をとっている。注文に応じ切れないくらいの人気である。」

在来工法は、旧式工法だと言う人がある、これを破らねばならない。懐古主義ではない、情報化時代にふさわしい新しい創意と工夫が必要である、特に台所と風呂場などは近代的で時代にマッチしたデザインが求められている。伝統は常に生きて動いている、古いものにこだわってはいけけない、そのためには設計が重要である。

木の良さはPRされて来た、国産材のPRはこれからである。外材と比較して科学的に良さを証明することはむづかしい、しかし医学的立場から近く証明されると思う。

動物は、その地域に育った植物に接してい

る時が一番心が安定していると云う。日本人も日本の木に接している時が一番心が安定する」

「木造は火災に弱点」

飯塚「木造建築はインテリアであり木を見せねばならない、構造材の木の美しさを内から鑑賞してもらわねばならない。」

木造の良さは、さわった感触、暖かさ、やわらかさ、香り、吸音、吸湿、快適性など第六感での良さである。」

「木造は、燃えやすいのが欠点であるが、燃えないと言うことは耐火ではない」

「木は、燃えるけれど耐火になりうる」

火災予防、消火体制が大切である。木造をもえない装置に研究する必要がある。

良い自動車を買うことに生きがいを持っている人もいる。美しいデザインの良い家を建てる事を生きがいと思う人が多くなると素晴らしい、質の良いものには幾らでも金を出す時代である。」

川崎さんからは「木」に対する知識経験不足、技術者の勉強会の必要性、大型木造建築の単年度工期の問題、乾燥材確保のむずかしさなどが出された。

日野さんからは、大型建築の用材加工施設をどうするか、若い大工さんの養成システム、軸組工法の改良、一〇〇年耐え得る木造建築、外材との価格差、大型木造建築に対する町の



取組み姿勢などが提起されたが紙面の都合で割愛をお許しいただきたい。

▽十一月十二・三日に

「木」のフォーラム△

上浮穴産業文化会館(久万町)で開催予定戦後の日本住宅は、欧米の模倣だとの批判もある「家庭生活が部屋ごとに分解し、家庭のふれあいが乏しくなった。」など生活のサイドからの論議が生まれつつある。高齢化社会の到来、日本人の生活習慣、気候風土など問いながら木造建築の再開発の論議を深めた。

・基調報告「久万町の木造在来建築」

久万町長 河野 修

・事例報告「カナダの木造建築の技法」

カナダ ジョン・M・パウルス先生

・記念講演「日本の伝統的木造建築の技法」

文化庁文化財保護部主任文化財調査官

半澤 重信先生

・基調講演「暮しの中から木造建築を考える」

日本女子大学住居学科教授

小川 信子先生

・パネルディスカッション

「木造建築の再開発とその問題点」

コーディネーター

愛媛大学名誉教授

猪緒 理

パネラー

日本女子大学住居学科教授

小川 信子

文化庁文化財保護部

半澤 重信

熊本大学工学部教授

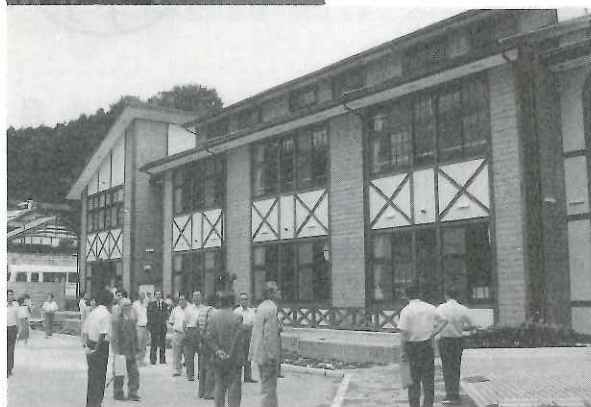
木島 安史

日本総合建築事務所

細田 治隆

二日目の午後は、このほど完成した美術館、小学校を見ていただくことになっています。大勢の方々のお参加をお待ちしています。

久万町立美術館



畑 野 川 小 学 校

くらしの中で考える…

遊子からの提言

ミニ・シンポ「海」レポート

63・8・9 宇和島市遊子漁協ホール

(財)愛媛県まちづくり総合センター 宮本清幸

お盆を控えた八月九日、夏を盛りの日、遊子の海は青く、「潮の匂いはこんなかったのか。」……私は思わず懐かしさとうれしさを感じてしまった。

「海……くらしの中で考える」(遊子からの提言)というテーマで開かれた集会は、実は今年で十四回を数える遊子の水産大学に乗っかるかたちとなった。水産大学はこれまで遊子の自分たちだけの「学習現場」であった。今回、ヨソモノを引きずり込んだ舞台設定が実現したことは、それだけで、「よし」としていいだろう。

そもそも、「熱い視線が向けられている海、そこで暮らす私たちがくらしの大切さ、提案することの大切さ、……さて」と呼びかけての舞台であった。

部会討議

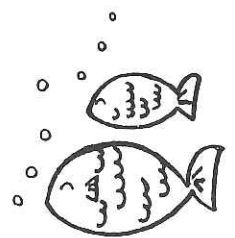
遊子からの提案を受けて

力及ばずで思うようにはいかず、だから準備不足とも重なり、思いをかけたはずの部会も焦点が絞られずの討議となったのか。

①第一部会(環境)提案

動をふまえての提案であった。水産大学の継続、海の汚染を考

える、合成洗剤の追放、死魚・死貝・作業の中から出るゴミの陸上処理の取り組み、海面環境保全の



日程

- 13:00 開会
13:10 部会討議 遊子からの提案を受けて……
第一部会 海……今、われら(環境)
提案者: 松末 源治(後継者会議会長)
助言者: 河畠 登紀
(五十崎町まちづくりシンポの会)
司会: 鎌田 宏史(城辺町商工会青年部)
第二部会 海……遊子のあゆみ
(生産、生活、そして文化)
提案者: 上原甚太郎
(遊子の歴史を記録する会々長)
助言者: 古谷 和夫(遊子漁協組合長)
司会: 藤本 一三(野村町役場)
第三部会 海……くらし(海を中心とした交流)
提案者: 山下 妙子(婦人部々長)
助言者: 小野 芳洪(てんやわんや王国)
司会: 浜松 為俊(瀬戸町役場)
15:10 休憩
15:20 全体討議 海/くらしの中で考える……
部会討議の報告を受けて
司会: 若松 進一
(21世紀えひめニューフロンティアグループ 双海町役場)
16:20 休憩



討議

●汚染防止、それは産業を守るというところからの出発なのか。海でくらししているところでは当り前のことだろう。

問題、沿岸清掃、水質調査、……しかし、汚染問題はなかなか成果があらない。
ソフトボールを通して得た「結果でなくプロセス」の問題。俺たちの生きざまをみてくれ、おやじたちの生きざまに学ぶ。

遊子を心身ともに健康なむらにしようと岸を離れたグループ「豊遊権」をよろしく。

●活動のエリアを広げていくためには遊子が「足元」というか「しっかりしたもの」を身につけなければならぬ。海だけでなく、もっと広いクリーン運動の展開。

●漁協の職員が「つなぎ」の役割を果たしているのは素晴らしい。

●山一川・まち一海といった連なった運動の展開。外へ向かってどう発信していくのかというところに手を着けていくこと。それにはそれなりの「エネルギー」が必要だろう。

●どこにでもプールができて「海では泳がないようにしましよう」となるのは恐ろしいことだ。

●組合長に任せっきりではちよつと不安なんじゃないか。（「さて自分は……」の主役の問題）

●「遊子からの提言」の極め付きは何といってもこれだ。「海のことなら遊子に聞け」——これを全国に向かって「まき餌」のごとくまき散らし続ける。そのうち、聞きつけた誰かは「遊子に行ってみようか」ということになる。（ヨソモノに來られて恥をかいなら、大きな顔をして「一生懸命」になればよい。）

発信基地たる教育（学習）施設も考えていいだろう。

②第二部会

（生産・生活・そして文化）

提 案

明治ごろから今日までの遊子、漁業形態の変遷、倒産などの試練、そして今日まで生産の海をどう守ってきたのかといったむらのあゆみ、魚食文化の問題について、歴史を歩んで来た立場からの提案があった。

討 議

●嫁に行きたくなる遊子、それは「仕事プラスゆとり」の遊子でなければならぬ。そのためにも、現在の月三回の休みでなく、せめて週休のある遊子にしようじゃないかという動きが後継者の中から出てきてほしい。

●「人間が行き詰まっているから海も行き詰まるんだ」これまでに比べると随分豊かになった生活、経済的なゆとりを今後どのようにしていくのか。ゆとりの質をどう高めていくのか。精神的、文化的な問題。

●都市部との交流——生活を大切にしていって交流、くらしをベースにした交流。遊子にしかないものを

つくる。

③第三部会

（海を中心とした交流）

提 案

婦人部の活動、くらしの「台所」からの提案となった。「海にゴミを捨てないで」——婦人の小さな呼びかけが組織を通じ、住民が動き、行政を動かした。そして赤潮——合成洗剤と粉せっけんの強制交換を実施。実践を通して組織の強さ、漁協のバックアップのたのしみを感じた。



県水産試験場・栽培漁業センター

ハマチの価格低迷、加工も含めて消費拡大の努力を地道に根気よく続けること。アイデア、気くばり、PR。

海は広いからといって無限ではないことを自覚し、「やりっぱなし」をしないこと。環境への気くばり。

「娘をやってよかった」「遊子に來てよかった」——そんな遊子にこれからも磨き続けること。よい「むら」の担い手としての若嫁への期待、役割が大であることを自覚しよう。

討 議

●一本釣りの人もまき餌をやっていた。（まき餌の問題は、漁協が遊漁者に注文をつけたという「内輪の問題」ではなく、地球とさかなが人間に呼びかけた、言ってみれば「神の声」と聞かなければ前進はない。）

●魚の消費動向——流通——消費者意識——抗生物質、養殖魚の不安。理屈で道は拓けない。「遊子に來いよ」の「交流」はどうか。

●産地と消費地の「距離」の問題は非常に知恵とエネルギーがいることがらだろう。



総 括 講 演

●自己PRとか市場調査、消費者の口にはいるまでをしつかり勉強すること。この点、一次産業の場合非常に弱い。

素晴らしい生産技術・体質に負けない「流通の勉強」が必要だ。

●魚もみかんも同じことだが、できたものは皆売ってしまうという考え方は改めるべきではないか。いいものをつくって、いい値で売る。よくないものは「適正な方法」で「処分」する。イメージアップだ。

全体討議

部会討議を
受けて

環境―文化―交流と部会討議が深まったのかと言えば、はなはだ自信がなくなる。ただ、シナリオ通りにいかなかったからと言って「舞台」が「無」かった訳ではなく、全体討議からの「流れ」はよかった、と言ったところで、それまでがあったればこそその「流れ」ではなかったのか。

遊子は、えびす盗みにあわないように「海のことなら遊子に聞け」をしつかりと位置づけなければならぬことがはっきりした。

立派な組合長に続く「ヒト」が後継者の中から生まれてくることを期待する声、大。

後継者は「自分のことば」でもっともっと話して下さい。前進して下さい。(後継者の妻)

総括講演

「海／くらしの中
で考える……」

長崎福三・財日本鯨類研究所
専務理事

話のイントロダクションとして
えびすの話しよう。

七福神の一人、漁の神のえびす

部 会 討 議



さまは、七人のうちでただ一人、日本人が考え出した国産の神である。
胡―中国人にとって、えびすとは外から「幸せ」を運んでくるもの。漁撈民は外から来た人をえびす

すとたたえて、ごちそうを振る舞った。浜に打ち上げられる木をより木というが、これもえびすだ。流れ仏(でき死者)もえびすとして手厚く扱われる。神社の守り本尊にも流れ仏が多い。東京浅草の浅草寺もそうだ。

日本の漁撈民の起源を中国沿岸部の江南に求めることができる。半農半漁の江南漁撈民が稲作と漁撈を北九州に持ち込んだと考えられている。

お米と魚をいっしょにするとなれずしになる。日本におすしを持ち込んだのは彼らであった。また、日本にうかい漁を持ち込んだのも彼らであり、龍宮の話も日本の漁民と共通している。このような漁撈民はやがて稲作技術を持って内陸部にはいった。そうして、漁撈民と農民の関係ができてくる。我が国の漁撈民は沿岸性海洋民族であり、沿岸を巧みに利用することが上手であるが、あまり遠洋性、沖合性ではなかった。これからも二百海里体制のもとで新しい沿岸漁業をつくりあげていくことだろう。

これは私の考えであるが、魚は元来、大量生産、大量消費には馴染まない。それをやろうとすればどこかに無理が出てくる。なぜか。大量に生産しようとするとき食性段階の低い、価格の安い魚に依存することになり、魚体も小さくなっていく。養殖漁業でさえマスプロ



交流シンポジウム

ダクシヨンは合わない。安定して、いい魚がとれる漁業。
これからの漁業は……。全体を考えて漁業を考える。魚だけを考えるのではなく、魚がいる海を考える。魚が食べる餌を考える。海は貴重な財産であるから、どういう格好でそれを子孫に残すのか。海を汚して生産を一時的に上げても、十年は続いても長くは続かない。宇和海の「海」をこういった観点から考えてもらいたい。
マグロのさしみは食べるが、ハマチは食べない。ハマチがおいしくないからではない。一度うわさが広がると、元に戻るまでには非

常に長い年月がかかる。

つくるだけではなくて、売るところまで考える漁業、流通の現場まで眼を向ける漁業を考えてほしい。

ミニ・シンポ「海」

とも言えども、

私にとっては「巨」であり、三月あたりからあれやこれやと思いつくせめた末の学習会であった。

ただ、終ってしまえばまさしく「あとの祭り」となって「さて、」ということになる。

さて、試験が終われば点数が気かりになる。私は、採点者になることを許していただいて、この集會に七十五点をつけた。あとの二十五点はどうするのか。それは遊子からの声、遊子からの「発信」である。

全体討議において、「地元の声が弱い」という質問に、地元の発言はまさに二十五点であった。「水産大学も十四回を数えるが、今だに大学院までに成長していない。創業者の強さというのは、うしろにおられる年配の人たちの強さ。我々二世代的な者たちには坊ちゃん的な弱さがある。『平素』

の「取り組み」に「弱さ」があるからこういう時に意見が出ないのだ、と反省します。」

他人のことばを借りれば「隠し味、名脇役、長老がいるのに主役の若者が弱い、本物の舞台がつくれない」といったところか。

これでミニ・シンポ「海」は百点となる。ただ、「さて、なのだ。百点は百点でしかなく、「満点」とは「意味」がちがう。

川から来た「えびす」「海のことなら遊子に聞け」をひきつけて、遊子よ、「満点」に向かって歩め。



！編集係が 変わりました！

「舞・たうん編集係の一員だった都築京子さんが八月三十一日付でセンターを退職しました。



おつかれさま！

九月一日からセンターの一員となりました丹下真澄です。
「舞・たうん」VOL7、いかがでしたか。

これからもがんばりますので、応援して下さいね。みなさんのご意見、おまちしています。



Town タウン

パソコン通信ネットワーク

広げましょう ヒューマン ネットワーク

Vol. 3



えひめコンピューターコミュニケーションクラブ

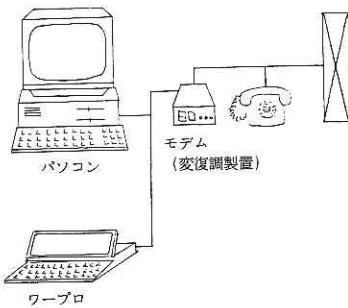
習うより慣れろ、

まず始めてみませんか！

みなさんは、ワープロ・パソコン通信を特殊なものだと思われていませんか？確かに二三年前までは事業所やパソコンマニア達だけが利用していた高価な通信手段でしたが、今日では電話と同様、テレ・コミュニケーションの道具・手段として、小学生から七十代のおじいちゃんまで誰れもが利用しています。

ワープロ・パソコン通信を始めるためには、図一に示す道具を買い揃えるだけです。アマチュア無線のような特別な資格は必要ありませんから、手軽に始められます。すでにパソコンをお持ちの方でしたら、一万円程度の通信ソフト

図一 ワープロ/パソコン通信に必要な道具



と二万円程度のモデムを揃えるだけで済みます。また、すべてこれからという方は、何も高価なパソコンを買う必要はありません。パソコン通信のできる比較的安価な卓上型ワープロが市販されていますので（最近では、ワープロにパソコン通信機能が付いているのは当然のようになりました）、ワープロとオプションの通信セット、

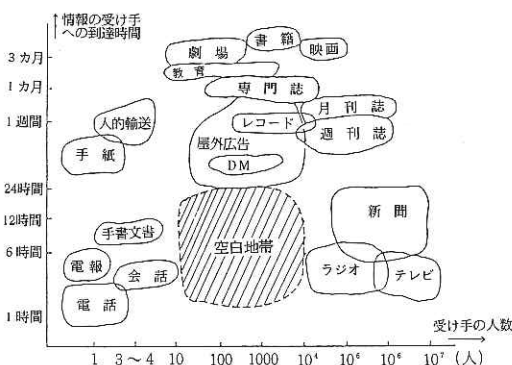
モデムをすべて合わせても一五万円でおつりがきます。

これらの道具を揃えたら、次に通信ができる状態に機器をセット、それだけでOK!! いつでも、好きなときに、手持ちのワープロ又はパソコンが通信機に早変わり。日本中のあるいは世界のデータベースや各種ネットワークにアクセス（接続）して、情報を収集したり、お互いに交換したりすることができ、事前（アクセスするためには、事前に相手先と契約しておく必要があります）。

さて、ここで、機器のセット方法と、通信の操作方法ですが、それぞれのマニュアルを読みながらやれば何とかできると思いますが、初心者の方にはこのマニュアルがなかなか難物のようなです。そこで、本会（ECCC）では、道具の遊び方からセットのしかた、操作方法まですべてご指導いたします。ECCC事務局のある（財）愛媛県まちづくり総合センターまでご連絡ください。

メディアとしての位置づけ
ワープロ・パソコン通信は、一つの通信手段（メディア）であり、

図二 情報メディアのエリアマップ



私達はお互いに交流を深め、自己を高めるための補助手段としてこれを利用しています。それでは、このワープロ・パソコン通信は他のメディアと比較してどのような位置にあるのでしょうか。

図二に、各情報メディアのエリアマップがありますが、この図でちょうど「空白地帯」となっているところ、ここに位置します。

ワープロ・パソコン通信に限らず、ニューメディアは情報の多品種少量化に対応して導入されていく技術であると言われ、メディアを目的に合わせて上手に使いこなしていく技術もまた必要になるのではないのでしょうか。

県民総合文化祭'88

愛媛県生活文化局 文化振興課

県では、新たな県民文化の創造と活力ある郷土づくりを目指して十一月十九日(土)から、二十七日(日)までの九日間、県民文化会館を主会場として県民総合文化祭'88を開催します。

日程は、別表のとおりですが、従来から実施していた「愛媛芸術祭」「文楽合同公演大会」のうえに、お茶・お花・モダンダンス・囲碁・将棋を加えるとともに、これまで個別に実施していた県産品まつり、農林水産まつり、愛媛の祭りを統合して「えひめ産業文化まつり」として、実施することとしました。

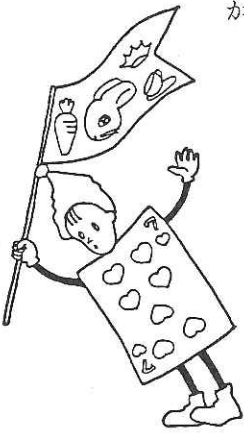
このほか、特に興味深い催しとして、次の二つがあげられます。
○オープニング・フェスティバル
県民総合文化祭の開会を告げるこの催しでは、ロックバンドとジャズダンス、シンセサイザーと邦楽、

琴と洋舞など異なった分野のジョイントを試みるほか、民謡、太鼓、合唱、ミニオペラ、オーケストラなど色々な分野の方々に出演していただき、楽しく創造性あふれる催しにしたいと思っています。

○瀬戸内生活文化フォーラム

次の方々を招いて、新しい瀬戸内の地域デザインを考えるフォーラムを開きます。

記念講演 丹下健三(建築家)
基調講演 小松左京(作家)
分科会等 加藤秀俊(放送教育開発センター所長)、榮久庵憲司(インダストリアル・デザイナー)、菊竹清訓(建築家)ほか



県民総合文化祭'88日程表



日	時	催し物	会場
二月九日(土)		☆オープニングフェスティバル (四・〇〇～一六・三〇)	県民文化会館 メインホール
二日(日)		洋舞 (四・〇〇～一七・〇〇) 民謡・民舞 (一三・〇〇～一六・三〇) 俳句大会 (一三・〇〇～一六・三〇) ☆知事杯争奪囲碁大会 (一〇・〇〇～一三・〇〇)	メインホール サブホール 真珠の間 会議室
三日(月)		文楽合同公演大会 (一〇・〇〇～一六・〇〇)	サブホール
三日(火)		☆モダンダンスの夕べ (一八・〇〇～二〇・三〇)	サブホール
三日(水)		☆えひめ産業文化まつり 三日(一〇・〇〇～一七・〇〇) 四日(九・〇〇～一五・三〇)	県民文化会館 (県民広場等) 農業試験場
四日(木)		☆瀬戸内生活文化フォーラム (一〇・〇〇～一七・三〇)	サブホール
六日(土)		吟詠剣詩舞 (一八・〇〇～二一・〇〇)	サブホール
七日(日)		合唱 (一三・〇〇～一六・〇〇) 日舞 (一三・〇〇～一六・三〇) 琵琶 (一〇・〇〇～一三・〇〇) ☆知事杯争奪将棋大会 (一〇・〇〇～一三・〇〇)	メインホール サブホール にぎたつ会館 県民文化会館 会議室

(☆新規催し)

県民総合文化祭についての問合せや参加申し込みは次のところへお願いします。

〒七九〇 松山市一番町四丁目四の二

愛媛県生活文化局文化振興課

TEL 〇八九九-四一-二二二

(内 二一八五)

〇八九九-四五一-二八五〇(直通)

※ いけばな展 11月19日, 20日, 25日, 26日, 27日
野点の会 11月20日, 27日

研究会議からのお知らせ

えひめ地域づくり研究会議も昨年11月14日に発足以来、1年を迎えようとしております。つきましては、第1回総会を下記のとおり開催しますのでご案内申し上げます。

記

- 1 日 時 昭和63年11月12日(土) 11:00~12:00
- 2 場 所 上浮穴郡久万町久万町民館2F(ホール)
- 3 会次第
 - (1) 開 会
 - (2) 来賓挨拶(愛媛県、久万町)
 - (3) 議案審議
 - 事業報告及び決算報告
 - 事業計画(案)及び収支予算(案)
 - 運営委員選任等
 - (4) 閉 会



※ 同日、午後から上浮穴産業文化会館で久万町、えひめ地域づくり研究会議、当まちづくり総合センターほかが主催する「木のフォーラム」が開催されますので、総会終了後は是非ご参加下さい。

◎ 総会への参加申し込み先

(財)愛媛県まちづくり総合センター内 えひめ地域づくり研究会議事務局

〒 790 松山市道後一万1-2

TEL 0899-25-5557 FAX 0899-25-6680

まちづくり活動の情報誌として、

この「舞・たうん」を隔月で発行しております。

皆様からのレター通信誌として活用下されば幸いです。

次回「舞・たうん」特集は

“な・か・ま”です。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどしどしお寄せ下さい。

お待ちしております。

「舞・たうん」編集係

二人のGAL(丹下・久保田)まで。

〒七九〇 松山市道後一万一の二

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

TEL〇八九九(二五)五五五七
FAX〇八九九(二五)六六八〇